オーディオ実験室収載

ライブストリーミングを楽しむ(20)
—112 回 TWILIGHT CONCERT—

1．始めに

112 回 TWILIGHT CONCERT と称する無観客ライブの公開の案内があり、視聴してみました。

https://pr.iij.ad.jp/live/

2．ライブストリーミング情報入手源と PC および使用機器環境

112 回 TWILIGHT CONCERT は次のようなプログラムです。

「ブラームスの晩年の名作——2 曲のクラリネット・ソナタと、ワーグナー、ベルクの作品を、日本を代表するクラリネット奏者・三界秀実と、名手・加藤洋之が、2021 年の幕開けにお届けする心温まる一夜。

演奏：

三界秀実（クラリネット）

加藤洋之（ピアノ）

曲目：

ブラームス：クラリネット・ソナタ 第 1 番 ヘ短調 op.120-1

ワーグナー：《ヴェーゼンドンク歌曲集》より　第 3 曲「温室にて」

ベルク：4 つの小品 op.5

ブラームス：クラリネット・ソナタ 第 2 番 変ホ長調 op.120-2」

2020 年 12 月 21 日（月）開演 18:30 終演 19:30
三井住友銀行東館ライジング･スクエア 1 階アース･ガーデン」
PC はいつもの音楽用 PC です。
112TWILGHTCONCERT プログラム

3. ライブストリーミングの経過

TWILIGHT CONCERT は東京大手町オフィス街へ 「音楽のおくりもの」と題して大手町の三井住友銀行ロビーで、2008 年より毎月 1 回「ゆうべの音楽」をテーマにしたコンサートですが、今回も無観客で配信のみでの参加可能です。
サイトには次のような解説がありました。
「新年あけましておめでとうございます。激動の 2020 年も過ぎ、2021 年が明けました。
すでに初詣に行かれたほとんどの方が同じ願いを抱いたはず。私もとりあえず「なんでもいいから今よりマシになって」とリモートで祈願しました、、、ちょっと乱暴だったかな? でもちゃんと神様には感謝の気持ちを伝えましたよ。
トワイライトコンサート的には早くお客様をお呼びして「演奏会」のライブをお届けしたいのですが、またちょっと先行きがわからなくなっちゃいましたね。
無観客配信オンリーの状態が続くかもしれないので、私としては演奏会の臨場感が伝わるような曲目解説を心掛け、精進してまいります。
さて年末のクリスマスプログラムとは対照的に新年の幕開けはブラームスのソナタ 2 曲入りというガチ（マニアック）プロ。超実力派の三界秀実（クラリネット）、加藤洋之（ピアノ）がお届け致します。
ヨハネス・ブラームス(1833-1897):クラリネット・ソナタ 第 1 番 ヘ短調 op.120-1
I.Allegro appassionato
II.Andante un poco adagio
III.Allegretto grazioso
IV.Vivace
のっけから自分語りで大変恐縮ですが、「好き」、「嫌い」は別にしてとても思い出深い曲です。学生時代、初っ端の室内楽の課題として与えられた曲で、「メントリ ニ短調」、「フランクのヴァイオリン・ソナタ」など有名で華やかな曲ばかりにしか興味がなかった愚かな私にとってめちゃくちゃハードルが高かった記憶があります。
ブラームス楽曲によくある「ヘミオラ」や単純な「シンコペーション」、ソロで弾く時はそれほど苦にならなかったのですが、他楽器と合わせようとすると、何処で何をどのように弾いていいか解らなくなるんです。己の甘さを痛感し、鼻をへし折られたほろ苦い思い出あり。

その時のインパクトがあまりに強すぎて、どんな簡単な伴奏曲でさえも演奏パートナーが存在する以上「気絶しても合わせられるくらいの準備をすること」と、ある意味意識を変えられた重要な曲として自分の中に存在してます。あの時この曲を与えてくださった先生、ご迷惑をおかけしちゃったクラリネット科の方（両方とも名前は忘れたけど）、本当にありがとうございました。
冒頭で「好き」、「嫌い」は別にしてと書きましたが、はっきり言って第 1 楽章は「弾く方」にも「聴く方」にもとっつきにくいです。それなりに美しいところもあるし、ドラマチックな場面もあるのだが、いかんせんフラグメンタル(断片的)な要素が多過ぎ。
それをどう構築していくかが演奏家の腕のみせどころで、今日のようにプログラムに入っていることを知ると「一体どんな料理の仕方をするんだろう」と非常に好奇心を掻き立てられる、不思議な魅力のある曲です。スルメのように噛めば噛むほど味が出る、そんな印象でしょうか。その反動か、残りの楽章は曲が素直に耳に入って来るので聞きやすいです。特に第 2 楽章の旋律の美しさは絶品。
リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）：《ヴェーゼンドンク歌曲集》より第 3 曲「温室にて」
楽劇「トリスタンとイゾルデ」と並行して作られた 5 つの楽曲からなる連鎖歌曲集、第 3 番目にあたる。超不安定な和音の進行が耽美な世界観を生み出し、いかにも「ザ・後期ロマン派の歌曲」でございます。本日はクラリネット音色でお楽しみください。
アルバン・ベルク（1885-1935）：4 つの小品 op.5
I.中庸の速度で（Mäßig）
II.きわめて遅く（Sehr langsam）
III.きわめて速く（Sehr rasch）
IV.遅く（Langsam）
ベルクがクラリネットとピアノのために書いた室内楽曲で最長でも 20 小節という文字通りの小品。当時、調性がある楽曲から無調への曲がトレンドとしてもてはやされたが、ベルクはそこはかとなく調性を匂わせた。聴いただけだと訳がわからないけれども、楽譜を見てみると音がシンメトリー（幾何学的）に配置されていたりして、あーなるほどね、と非常に興味深い。
ヨハネス・ブラームス(1833-1897):クラリネット・ソナタ第 2 番変ホ長調 op.120-2
I.Allegro amabile
II.Allegro appassionato
III.Andante con moto
IV.Allegro

第１番とはうって変わって聴き手にも弾き手にも集中しやすい曲。 またもやピアニスト目線になっちゃいますが、華やかではないものの音域まるかぶりな上、分厚いテクスチュアを処理しながら「アマービレ（愛らしく、優しく）」表現しなくちゃいけないブラームスによくあるコントロールが難しい曲。さらに付け加えるのならば室内楽におけるレガート奏法、フレージングについて改めて深く考えさせられる楽曲（だってスラーの位置が初期古典派みたいに意味不明なんだもん）。
第１楽章と第２楽章が同様に重厚で兄弟のような位置づけになっているのが特徴。緩徐楽章である第３楽章はシンコペーションだらけで小節線マル無視。結果掴み所のない独特の浮遊感がでている。アタッカでいきなりはじまる第４楽章は短すぎてとってつけた感が否めません。以前にもブラームスの曲目解説で同じようなことを書いたような記憶が、、、無理に技巧的な楽章くっつけてフィナーレ感をだそうとせず、しっとりと第３楽章で終わらせてもよかったのでは（というのが私の素直な感想です、超難しいし）。　　曲目解説：田口寛」

曲の解説は上記サイトの解説で十分尽くされており、鑑賞の助けとなります。ピアノの加藤洋之はヴァイオリンの郷古簾とのコンビでベートーヴェンのソナタでお馴染みですが、クラリネットの三界秀実は初めて聴きます。ともに中堅の実力派らしい堅実な演奏で、ブラームスやベルクなどの解釈の難しい曲を的確に演奏していました。

４．まとめ

バランスアナログアキュライザーが加わったことにより、音質はこれまでの YouTube などの限界を超えた感があり、ライブ感は十分出ています。演奏会開催ができない間、こういった企画で演奏家と音楽愛好家を繋ぐ手段としてあってもいいと思われます。

以上